
WONDERLAND × DANGERGEAME

山田太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WONDERLAND×DANGERRGAME

【Nコード】

N7596K

【作者名】

山田太郎

【あらすじ】

『ルールは簡単。銃火器OK、爆弾OK、とにかく一定数になるまで生き残れば勝ち』

光の届かぬ不思議な世界。連れて来られた少年、浩介。

現実に自分の存在の意義を見いだせなくなった少年は、奇妙な少女に手を引かれ、ともに勝利を目指す。

プロローグ

さつき、着地した時に捻った右足首が痛い。骨折かも……。月明かりも届かない陰湿な路地で、ひっそりと息をひそめる。

辺りは静寂に包まれ、街灯と月以外に光源も見当たらない。

人っ子一人見当たらない。何の気配もしない。

たまに遠くで響く銃声と舞い上がる噴煙で、他の生物の存在を確認できる。

隣で、壁に寄り掛かってすやすや眠る少女の手には拳銃が握られている。

そして、彼女の腰のベルトには、サバイバルナイフが刺さっている。なにより、だらんと放り出した俺の手に乗っているそれも、少女のものと変わりない。

スマートで、コンパクトで、人差し指一つで命を奪える……

俺の右手のそれは、そのものがもつ重みより遥かにズシリと手にのしかかった。

……
……
……

ここで質問。

- 1 . この状況はいつたい何だろう？
- 2 . ここはどこだろう？
- 3 . この先、俺はいつたいどうなるんだろう？

俺は、説明書もなく俺をこんな所へ放り込んだ奴を、思いつきりぶん殴ることを心に誓って目を閉じた。

まあ後日、俺は自分の顔を百万回殴らなくてはならない羽目になる訳だけど、それは全然あとの話だ。

・・・死にたくなつた。

爽やかな初夏の昼下がりに。家の外からかすかに、少年達の楽しげな笑い声が聞こえてくる。

開かれてる数学のノート。放り出したペン。机の前に一人、何を考へるともなくボーっとしていた時、ふとそんな考えが浮かんだ。

毎日、同じ家 同じ電車 同じ学校 同じことの繰り返し。なんとなく楽しいから友達とだべって、なんとなく恋して、将来「りっぱなおとな」になれないから勉強して、このままなんとなく大人になつて行くんだ。なんてうつすら思つて・・・

なんか・・・俺、何のために生きてんのかな。なんて思つたりして・・・

前にも何回かこんなこと思つて、死にたくなつた。・・・なつただけだけ。

少女の放つた弾丸が、サングラスの男の額を撃ち抜いた。

「こつちへ来て、早く！」

国道をはさんだ向こう側から、少女が手招きしている。

しかし少年の脳内は、つい今しがた自分を撃ち殺そうとしていたグラサン男と、そいつの頭をハンドガンで撃ちぬいた見知らぬ少女の、どちらのそばが安全なのかを測りにかけることに没頭して、ろくに少女の声を聞いてなかった。

銃声を聞きつけ、数人の大人たちがあちこちの路地から顔を出した。ここで、もし、その大人たちが、サブマシンガンやらハンドガンや

らを持つていなければ、その銃口をこちらに向けていなければ、あるいはお互いに撃ち合いを始めなければ、少年は真っ直ぐ大人たちのもとへ駆け込み、救いを求めたのだろうか………

これは、あごの震えが止まらないとか言ってる場合ではない。足が笑って走れないとか言ってる場合ではない。

少年は、銃弾の飛び交う国道を突っ切り、少女のいる路地へひたすら走った。

少女の方は、自前のハンドガンで辺りに牽制をかける。

少年は、その後の事を、臆げにしか記憶していない。覚えているのは、ただ必死になって走ったこと。少女に手を引かれるまま、路地から路地へ。

たどり着いたのは、小さな会社の事務所らしい所だった。

「……OK。もう付いてきてないね」

少女が外を窺いながら言った。

「いったい何がOKなのか……」

「あの……いまいち頭が付いていかないんだけど、とりあえず、助けてくれてありがとう……かな？」

まさか、お前は私の手で葬ってやるために生かしておいたのだ！なんて展開、無いとは思いますが、次に何が起こってもおかしくない状況であることは確かだ。

「お礼はいらんよ。代わりに次から気をつけてよ。大通りを一人で歩くなんて自殺行為だよ」

少女は朗らかに応え、一番高価そうな革張りの椅子に腰を下ろした。

「しかし、銃撃戦の中を突っ切るなんて……バカもいいところ、つてか、よく当たんなかったね。素人ばかりで良かったね。」

少女はうんうんと頷きながら、なおも続ける。こつちがしゃべるまで言い続けるつもりなのか、しゃべらす気がないのか。

「だいたい丸腰なんてなめてるよ。君、殺されに来たの？死体役はまにあってますよ？」

おまけにかなりの毒舌の様子だ。一体どうやったら、出会ったばかりの、見ず知らずの少年の心をここまで傷つけることができるのだろうか……。

「……で、えっと、何の話かっというと、とにかく、このゲームに参加してて武器持ってないってただのだから……」

ゲーム？これはゲームなのか？だったらこんな理不尽なゲームはない。全員にルールの説明もないのだから。

「え、っと……だから、ひとまず貸してあげる」

そう言っただけ少女は、鋼でできた何かの「安全な方」をこちらに向けて差し出した。

見なくても、触らなくても『それ』が何かは分かる。無論、玩具じゃないことも。

「ベレッタM92Fだよ。カッコいいでしょ？」

少年は、恐る恐る、差し出されたハンドガンを受け取った。

「そんなビクビクしなさんなよ。男の子だろう？」

ちびっこに諭すような言い方で言っただけ、少女はクスツと笑った。

「……恐いもんは恐いだろ。男女関係なく」

少年は、銃口がいきなり180度回転してこっちを向いた時に備えて、かわすためのイメージトレーニングに没頭しながら答えた。

「お、しゃべったね」

そう言っただけ少女はまたクスツと笑った。この子には笑顔が似合う。

しばらく少年の銃との格闘を見つめた後、少女は口を開いた。

「君、お名前は？」

「浩介。安田浩介。」

答えた後、銃が完全に沈黙を保ち続けている事を確認して、少女に向きなおった。

「アンタは？」

「……みずき」

若干の間があった。

「へえ。水の水に希望の希？あ、美しい月の方？」

「・・・カタカナでミズキだよ。君、以外に饒舌だね」

「話してでもいなきや、おかしくなりそうなんだよ。で、名字は？」

「・・・ミズキでいいよ。友達にもそう呼ばれてるし。よろしく。ワトソン君」

「・・・カタカナでミズキと書いてホームズ？難しい名前だな」

すると彼女はアハハと笑って

「冗談冗談。よろしく。コースケ」

・・・名前で呼ばれるのは、少し抵抗があるな。何かむずがゆい。ところで、ミズキの外見は、暗闇で見た限りでは、浩介と、そうはなれた年でもなさそうだった。肩まで伸びた栗色の髪。整った顔立ち。華奢な体。どこにでもいそうな女子高校生だ。それに、相当、魅力的だったと思う。こんな状況でなければ、見惚れていたかもしれない。

「さて、それじゃそろそろ行くところかワトソン君」

ミズキは、しばらく携帯電話をいじってから言った。

「おお、やっと帰れる」

浩介は、ぐっ、と伸びをした。

「え？帰るってどこに？」

「え？この出口に連れてってくれるんだろ？」

「え・・・」

ミズキは丸二秒くらい、浩介の顔を見つめた。

「・・・何が変なんだよ？武器があっても、道がわからないんだから、帰りようがないだろ？」

ミズキは聞いた。

「君、ここにどうやって来たの？」

「・・・気づいたら、ここにいた」

少し真剣な顔でミズキは訊ねた。

「質問変更。ここはどこだか解る？」

「さあ？俺の夢の中じゃないの？」

「夢に出口なんてあるの？」

そんなもん俺が知りたい。

それをそのまま言っと、「論点がずれた」

と言っつてミズキはうっつと考え込む素振りを見せた。

「君は、メールとかあんまりよく見ない人なの？」

「メール？」

そういえば、携帯はどこだろう？それで他の人と連絡が取れるじゃないか！

必死にポケットを探す浩介に、ミズキは言った。

「意味無いよ。今はゲーム仕様になってるから」

「てか、ゲームってどうゆう事なんだ？」

「そのままの意味だよ。これはゲームなのさ。勝者には、賞金があるんだ」

ミズキはグツと拳をかける。

「そんな話、今聞いたぞ。ルールだつて知らないし」

「ルールなら、携帯のメモ帳で確認できるぜ」

半信半疑ながらも、浩介はメモ帳を開いて見ることにした。この訳の分からないところでは、今はミズキに手を引いてもらうしかない。携帯のメモ帳を開くと、『ルール？』という題名のメモが確かにあった。そして、？、？、？といった調子に下の方までズラツと並んでいて、それぞれ開くと詳細が書かれていた。

「・・・しかし、携帯の使い方も含めて、ゲームの内容を参加者に伝えないってのはどうなんだ？ゲームとして」

「ちゃんと説明はあったよ。君が見なかったんだ。きっと、迷惑メール設定とかで・・・」

ミズキが言い終わらないうちに、建物に、爆発音と震動が響いた。とっさに身を伏せるミズキに、浩介もならう。

「さ、さっきの奴ら？」

「分からない。けど、道路のど真ん中走ってた君に当てられないよ。うな素人なら、さっきの撒けたと思っただけだな」

「アンタが走れって言ったんだろ！そんなに危なかったのかよ！」
小声で怒鳴る。

「あそこで合流できてなきゃ、どうせ君死んでたよ・・・っと、そ
っちはダメ。上に行こう。屋上に出られるはずだから」

二人は、部屋の奥の階段を駆け上った。

「じゃあ、アンタと一緒に助かんのかよ？」

なかなか大きな建物だったらしく、屋上からはこの辺りが一望でき
た。

手摺に寄り掛かり、しばらく下を眺めていたミズキは、振り向いて
言った。

「・・・君は助かりたい？」

「・・・は？あたりまえだろ。そんなもん」

「君が生きたいって望むのなら、私は君を助けるよ。」

「・・・けど、君が生きたくないのなら、私は君を置いていく。」

「だから、そんなん決まってるだろ！生きたいってば！」

「生きるって、そんなに簡単なことじゃないんだよ？」

「そんなこと解ってるし、さんざん聞いている。てゆうか今は道德の
授業やってる場合じゃないだろ。あいつらが来る！」

「・・・わかってるならいいけど。ただ、生きる気がない君は助け
る余裕はないよ。ってだけ。」

ミズキはまたクスツと笑って、行こっか。と言った。

浩介は、頷いた。

差しのべられた手は、天使の微笑みか、悪魔の囁きか・・・

まるでこの夜が明けることは無いと暗示しているように、空は真っ
暗で、星ひとつ瞬いてはいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7596k/>

WONDERLAND x DANGERGEAME

2010年10月28日06時50分発行